

## 第 7 回三重大学教育学部外部評価委員会記録

### 評価項目 「附属学校園のこれまで・これから」

【丹保学部長】 それでは、時間になりましたので、始めたいと思います。最初に教育学部を代表いたしまして、ご挨拶をいたしたいと思います。

本日はお忙しい中を、教育学部のために集まってくれましたことを、心よりお礼を申し上げます。日ごろ、実習とか、それから現場のほうとのいろいろな関係もありまして、いろいろとお世話になっておりますことを、心よりお礼申し上げます。今回は附属学校を対象にした外部評価ということでございます。附属学校は、いろいろと努力してまいりましたけれども、まだまだ問題が残っておりますので、そういうところを、忌憚のないご意見をいただければというふうに思っております。

ご挨拶はこのあたりにしまして、早速、始めていきたいと思いますが、司会役を、本校、大学教員の蓮尾先生にお願いしたいと思いますが、よろしければ、蓮尾先生ということで、お願いいたしたいと思います。それでは蓮尾先生、進行のほうをお願いいたします。

【司会・進行 - 蓮尾自己点検・評価特別委員会副委員長（以下 司会 - 蓮尾）】 ただ今、司会役を承りました蓮尾でございます。よろしくをお願いいたします。それでは、進行させていただきます。最初に紹介をさせていただきます。まず、学外委員の方から、ご紹介させていただきます。三重県教育委員会経営企画分野教育改革室長、山口千代己様。津市教育委員会教育長、田中彌様。四日市市教育委員会教育長、川北欣哉様。三重県高等学校長協会会長、小林秀則様。三重県小中学校長会会長、古儀憲次郎様。三重県国公立幼稚園長会書記、小林芳子様。三重大学教育学部同窓会副会長、沓張久治様。

それでは、三重大学のほう、紹介させていただきます。丹保学部長でございます。東三重大学評議員でございます。伊藤教育学部副学部長でございます。中島教育学部自己点検・評価特別委員会委員長でございます。上垣教育学部長補佐でございます。それから、早瀬教育学部長補佐と荒川専修代表者会議議長は、授業の都合で遅れて出席いたします。宮崎教育学部附属小学校長でございます。濱田教育学部附属小学校副校長でございます。平見教育学部附属中学校副校長でございます。清水教育学部附属養護学校副校長でございます。北谷教育学部附属幼稚園副園長でございます。

引き続きまして、教育学部事務方のほうをご紹介いたします。堀教育学部チームリーダーでございます。村田附属学校チームリーダーでございます。紀平チーフでございます。山下チーフでございます。事務担当の土性チーフでございます。同じく横山チーフでございます。以上、よろしくをお願いいたします。

概要の説明に入ります前に、学外委員の皆様の間で代表選出をお願いいたしておりました。その結果、座長は山口千代己様にお願いすることになりました。よろしくをお願いいたします。

次に、事前配布の資料確認をさせていただきます。資料、『三重大学概要平成 18 年度』が第 1 番目でございます。2 番目に、『三重大学教育学部案内』でございます。3 番目に、『三重大学教育学部附属学校 4 校園の要覧』各 1 部でございます。4 番目、『附属学校関係

資料』でございます。5番目、『平成17年度教育課程検討委員会報告書』でございます。6番目、『学部・附属学校連携推進協議会の報告』でございます。7番目、『「教育実習指導のあり方」に関する総合的研究( )』でございます。8番目、『教育実習及び介護等体験の実施状況表』でございます。9番目、『三重大学教育学部の中期計画・中期目標及び途中報告』でございます。10番目は、『附属学校の中期計画・中期目標及び途中報告』でございます。次に、『三重大学教育学部における課題と展望 No.14』でございます。最後になりますけれども、『平成17年度卒業生就職状況調』でございます。以上でございます。

それから、当日配布の資料、1枚目は、『第7回三重大学教育学部外部評価委員会次第』でございます。2枚目の同『座席表』でございます。3枚目が、学外委員の方からの『事前質問』の分でございます。この3枚が当日配布の資料でございます。

それでは、座談会に入ります前に、皆様にお願いがございます。それは、今日の座談会の内容を後日、報告書にまとめさせていただきますために、本日の内容を録音しております。そこで、ご発言の前には氏名を確認させていただきます。それから、ご発言いただく際は、必ずマイクをご使用ください。よろしくお願いいたします。

**【丹保学部長】** 今、マイクでお願いしましたけれども、後ほどすべて、発言をそのままではなくて、修正する機会がございますので、あまり神経質にならないで発言していただければと思います。それで、一度、発言した内容を起こしまして、それを各自にお返しして、校正をしていただく機会が必ずありますので、失言等がもし、万が一ありましたら、そのときに修正いただくということもございますので。これはちゃんとお約束しておかないと、非常に発言しにくくなりますので、そのところを予め申し上げておきたいと思います。

**【司会 - 蓮尾】** 以上よろしくお願いいたします。これから座談会に入りますけれども、最初に概要説明をお願いします。その後質問をお受けいたします。次に、事前質問をいただいた分について、学部からの回答をさせていただきます。

それではまず、三重大学の概要と教育学部案内につきまして、丹保学部長にお願いいたします。

**【丹保学部長】** 座ったまま失礼いたします。本日の外部評価は、三重大学と教育学部というよりも附属学校でございますので、大学と学部については、ごく簡単にお話をしたいと思います。

皆さん、ご存じのように、法人化以来、さまざまなことが行われておりまして、地域と共に世界に向けてというような、そういう合い言葉で大学全体は動いております。それから、予算的にも、毎年削減されておりますので、その辺のところをどういうふうにするかということが大きな課題として、学部にも、のし掛かってきております。それから、教育学部のほうも、いろんなプロジェクトとか、それから近年では、特に今年からですが、教員養成課程を、100名を145名にするとかですね。それから、地域と共にということで、教育委員会との連携を進めるというようなこと。それから、現場との連携ですね。この度、一身田中学校の校区と共に現代GPを取るというようなこともございましたし。そういうことで、かなり活発に学部全体としても行っているということでございます。

今日は附属学校中心ですので、附属のほうにすぐに回して、もし関連することがございましたら、いつでもご質問いただければ、お答えしたいというふうにしたいと思います。附属学校のほうで、よろしくお願いいたします。

【司会 - 蓮尾】 それでは引き続きまして、附属学校園の概要について、上垣学部長補佐から説明をお願いします。

【上垣学部長補佐】 私、地域連携、それから附属学校に関する事項を担当しております学部長補佐の上垣と申します。本日の外部評価委員会の評価項目が、『附属学校園のこれまで・これから』、というふうになっておりますので、私のほうから概要をご説明させていただきたいと思っております。座らせていただきます。

附属学校園の資料といたしましては、幾つかございますけれども、まず、この白表紙の表に『附属学校関係資料（外部評価）』と書いてございます、これが1つ目でございます。それから2つ目はピンク色の『平成17年度教育課程検討委員会報告書』、これが2つ目でございます。それからクリーム色と申しますか『「教育実習指導のあり方」に関する総合的研究（ ）』。これは平成17年度学部長裁量経費に基づく研究の報告書でございます。これが3つ目でございます。

それから4つ目は1枚物でございます、『学部・附属学校連携推進協議会の報告』とございまして、裏表ございますが、表のほうが連携推進協議会の報告となっております。それから5つ目が、同じく1枚物でございますが『教育実習及び介護等体験の実施状況表』。これは平成17年度の教育実習実施状況でございます。本日の外部評価が、平成17年度における附属学校園のもろもろの教育活動に対して行われるということでございましたので、主として17年度の資料をご用意させていただいております。それから最後でございますが、各4附属学校園の学校要覧が、それぞれ1つずつ入っております。以上が附属学校園に関する本日の資料でございます。

まず、附属学校園としての中期目標・中期計画でございますが、これは最初にご紹介をいたしましたこの白い表紙の冊子でございますが、これの目次を開けていただいたところに、ちょっとカラーでございますが、このように附属学校園の概要ということで、その中に附属学校園に関する中期目標・中期計画ということがうたっております。お手元には学部あるいは大学全体の中期計画・中期目標もございますけれども、それは字が細かくて、ちょっと見にくいと思えますし、こちらのほうに附属学校園に関する中期目標・中期計画を抽出してございますので、既にご覧いただいていると思えますけれども、それをご覧させていただきたいと思えます。

各附属学校園の個々の教育活動に、具体的な例を挙げて触れますと、相当な時間を要すると思えますので、ここでは附属4校園と、それから学部との連携の概要についてご説明をさせていただきたいというふうに思います。

平成17年度におきましては、3つの組織が中核となって教育活動を進めてまいりました。その3つの組織と申しますのは、先ほどのカラーの附属学校園の概要の裏側を見ていただければいいと思えます。

その冒頭に、番号としては3番とございますが、附属4校園の連携および附属学校園と教育学部との連携というふうでございます。そこに丸が3つ付いてございますが、一番上が4附属運営委員会、これが1つの組織でございます。それから2番目が、教育課程検討委員会というふうでございます。それから3つ目が、学部・附属学校連携推進協議会、この3つの組織が中心と言うか、中核となって、附属学校、そして教育学部との連携を取りながら、附属のもろもろの教育活動が進められてきたということでございます。それぞれ

の委員会の役割と申しますか、任務分担というのは、そこに個条書きで書いてございますので、これらの委員会がどういう任務を持って教育活動に当たっているかということが分かっていたらいいものと思います。

さて、平成 17 年度に取り組みました附属学校園関係の事項につきましては、1 枚物の資料を先ほど紹介いたしました、『学部・附属学校連携推進協議会の報告』というのがございます。この報告に個条書きでまとめておりますので、これを基にして、これから概要の説明をさせていただきたいと思っております。

この連携推進協議会に関する内規がございまして、その内規は、その報告の裏面にございます。第 1 条に「本学部に、三重大学教育学部学部・附属学校連携推進協議会を置く。」、任務は第 2 条、組織は第 3 条というように内規がございまして、私が 17 年度におきましては、この学部・附属学校連携推進協議会の委員長ということで担当をしております。

さて、表の報告の用紙につきましては、本協議会が設置されました 16 年度から、それぞれの年度、現在 18 年度の 10 月時点までの主な取り組み内容を個条書きで記しておりますので、ご覧いただきたいと思っております。本日は 17 年度の教育活動に関する外部評価でございますので、17 年度の項目を見ていただきたいと思っております。全部で 12 項目ございますが、順にご説明をさせていただきたいと思っております。

最初の 1 番と 2 番は教育実習に関するものでございますが、ご承知のように、附属学校園の大きな役割の 1 つが、教育実習を担当するということにございます。それに関するものが 1 番と 2 番でございます。現状では、3 年生のときに 4 週間実習を実施いたしまして、4 年生のときに 2 週間実習を実施いたします。

本学部には 4 つの課程がございまして、仮に A、B、C、D というアルファベットで呼んでおりますが、A 類と申しますのが教員養成課程でございます。この 4 月から定員が増えて 145 名になっております。それから B 類というのがございまして、これが情報教育課程でございます。定員が、この 1 年生から減りまして 20 名になっております。それから C 類と呼んでおりますが、生涯教育課程ということで、これは定員が 15 名でございます。それからもう 1 つ、D 類というのがございまして、人間発達科学課程、これは定員が 20 名でございます。合計 200 名ということになります。

先ほど申しました 4 週間実習を 3 年生で行って、2 週間実習を 4 年生で行うというのは、A 類と D 類でございます。B 類と C 類は 4 年時に 4 週間実習をするということになっております。A 類と D 類の 4 週間実習は、3 年生のときの 9 月から 10 月にかけて実施をされておまして、それから 4 年生の 2 週間実習は 5 月から 6 月にかけて実習をされております。だいたい、ここ数年、時期的にはそういうふうに固定されてきております。一時期、ちょっと 2 週間実習が別の時期にあったこともございますけれども、だいたい最近では 4 週間実習が 9 月から 10 月、2 週間実習が 5 月から 6 月ということで、附属学校園と、それから津市、あるいは四日市市、鈴鹿市等々の協力校で行われております。

実習に行っている学生の人数等につきましては、先ほど紹介しました教育実習実施状況、17 年度の実施状況の資料が 1 枚物でございますが、それをご覧いただければと思っております。これが 1 番目の内容です。

2 番目は、C 類の 3 年次教育実習というふうに項目がございまして、これはどういうことかと申しますと、先ほど申しましたように、C 類は 4 週間実習を 4 年生のときに、従来

までやってきており、現在もやってきております。しかしながら、ご承知のように、教員採用試験が4年生の7月にございますので、実習がそれ以後になるという、そういう状況にございまして、学生あるいは教員のほうから、C類の実習を3年次に何とかならないものかという強い要望が以前から出されておりました。

ところが、これを実施するためには、ある年度、3年生と4年生と、2学年分の実習をやる必要がございます。これは大変なこととございまして、この問題を何とか解決したいというのが17年度の大きな課題とございまして、幸い、連携協定書を結んでおります津市教育委員会様と、それから明日、実は協定書を結ぶ予定になっておりますけれども、四日市市の教育委員会様のご協力、ご努力によりまして、19年度、来年度にこの問題を解決するという目途が立っております。この目途が立ちましたのが17年度とございます。大変ありがたく思っております。

それから3番目の項目でございますが、3番目は「教育実地研究」という、これは新しい科目とございまして、最近、よく言われています教員の資質として、実践的な指導力ということが盛んに言われております。そのためには、既存の実習、4週間、2週間の教育実習だけではやはり不十分ではないかということで、新たに「教育実地研究」という科目を今年度から実施いたしておりますけれども、その準備を進めてまいりましたのが17年度とございます。17年度の5月あるいは6月ごろに、附属学校園と協力をして、懇談会、教育実地研究に関する懇談会というものを附属のほうで持たせていただいたということが3番目の項目とございます。

それから4番目と5番目は、パソコンの整備ということでございます。小学校につきましては、平成16年度の末に、ヒューレット・パカード社というところが、いろんな経緯を経ているわけですが、その会社からパソコンが四十数台、寄贈されるといいうことになりまして、ご承知かどうか分かりませんが、「スクイーク」というソフトがございます。このスクイークというソフトを使いまして、子どもたちの想像力、思考力を高める、そういう授業の中に組み込みたいと、そういうこともありまして、パソコン四十数台が小学校に整備をされまして、スクイークを用いた講習会が実施をされてきております。

17年度は、確か5月ぐらいだったと思っておりますけれども、小学校の5年生が約20名、その保護者が20名、約40名ぐらいだったかと思っておりますけれども、講習会を実施いたしました。今年も来月、12月とございますが、スクイークを用いた講習会を実施する予定とございます。

それから、中学校のほうもそれに連動いたしまして、これは寄贈ではございませんけれども、教育学部の予算で中学校のパソコンの整備をいたしました。これが4番と5番とございます。

それから、スクイークを用いた講習会と言いますのは、国際的な教育を進めるプランとも連動しております。それで文科省が今年度、国際教育推進プランというのを募集いたしましたのでございますけれども、それに採択をされました。これは『中日新聞』にも掲載されましたけれども、国際教育推進プランということで、文科省のほうで採択をされたということでございます。この件につきましては、大変、津市教育委員会様のほうにお世話になっておりまして、これは順調にいけば3年計画とございますので、これからも津市教育委員会様にお世話になることになるかと思っております。よろしく願いいたします。

この国際教育推進プランに関する紹介の一部が、一部分でございますが、先ほどの白表紙の最後に、国際教育推進プランに関する概要が少し紹介されておりますので、またご覧いただければと思います。

それから、元に戻りまして、連携推進協議会の報告の17年度分の現在、今、5番目を終わりました。次は6番目でございますが、そこに書いてございますように、附属学校では、例年でございますが、17年度だけではございませんが、県のほうの教員の研修の受け入れということを行っております。内容といたしましては、初任研ですね。それから5年研、それから10年研、それからもう1つ、指導力向上支援研修ですか、この4種類の研修を附属学校園のほうで受け入れているということでございます。これは16年度、今年度ももちろん継続した受け入れ体制が取られているということでございます。

それから7番目にまいります。これは「教育課程検討委員会の組織と活動」と書いてございますが、これは先ほど紹介をいたしましたピンク色の資料、冊子でございますが、『平成17年度教育課程検討委員会報告書』、既に目を通していただいているかと思っておりますので詳しくは申しませんが、17年度におきましては部会が3つございました。教育目標部会、入学者選抜部会、学校間交流部会でございます。それとあと、領域として7領域ですね。3部会7領域という体制で、附属4校園が中心でございますが、学部の教員のほうもかかわることのできる領域とか部会には、学部の教員も参加をして進めてまいっております。

この教育課程検討委員会と申しますのは、15年度に発足をいたしまして、一応、当初3年を目途にということで活動を進めてまいりましたので、15年度、16年度、17年度、17年度が一応、最終年度ということで、当初計画は終わっていますけれども、引き続き今年度もシステムを変えまして、継続して教育課程検討委員会が続いております。

この3カ年間の教育課程検討委員会の活動の中で、4校園の教員間の交流というのが大変進んでおりまして、あるいは生徒間の交流も進んでおりまして、例えば今年度ですと、ちょうど昨日でございますが、小学校6年生の児童が中学校へ行って体験授業をするという、そういう取り組みが行われるようになってきております。あるいは、本日でございますが、幼稚園をご覧になった方はお分かりかと思っておりますけれども、中学校3年生の生徒が家庭科の保育の授業内容にかかわって、幼稚園へ出かけて行って交流するというようなことも、本日行われております。このような附属4校園の教員、そして児童・生徒の交流が、この3カ年間の教育課程検討委員会の活動によって、活発になってきているということが挙げられると思います。

それから、8番目の項目でございますが、附属学校長の選考規定の見直しということをして17年度に行いました。従来は、選考委員会に学部長が入っていなかったということ、それから、校長候補者を1人だけ教授会に推薦をして信任投票を行うと、そういう仕組みでございました。それを、学部長を長として、それから複数の候補者を教授会に推薦して、投票によって決めると、そういうふうな内容改正を行いました。この白表紙の冊子の後ろのほうに「校則等」というのがございますが、その一番後ろの辺り、ちょっとページ数がないのですが、この「校則等」の後ろのほうに、新たに改正をされました「三重大学教育学部附属学校長選考内規」というのが掲載されておりますので、これもご覧いただいたものと思います。

それから、17年度におきましては附属幼稚園、それから附属小学校の学級定員について検討を開始したというのが9番目の項目でございます。公立学校等では、それぞれの加配等々で少人数の授業、あるいは習熟度というような取り組みが行われておりますけれども、附属学校の場合、ちょっとなかなか予算的な面で、少人数授業等は、非常に小さな範囲でしかできなかったわけです。そういうこともありまして、学級定員の見直しを行いたいということが、17年度に起こっております。

ただ、単に学級定員の見直しをするというだけでは、やっぱり将来展望というのを考えないといけない、その中で、学級のサイズをどうするかというような問題も考えたほうが良からうということで、現在では、学部長を委員長とする「附属学校将来構想委員会」というのが立ち上げられておりまして、そこで今現在、検討がされているというのが現状でございます。その発端が、17年度にあったというのが9番目の項目でございます。

それから10番目の項目は、そこに書いてございますように、附属小学校において、学部の教員が授業を行うと、そういう試みが17年度に行われました。学部教員も、これまでももちろん、さまざまな教育実習等々で、附属学校での教育あるいは実習、授業にかかわりを持ってきておりますけれども、やはり、もう少し附属の教科活動とか教育実習についての理解を、学部教員が深めていく必要もあると、そういう趣旨で、ちょうど4週間実習の期間中に、学部教員が小学校で授業を試みたということでございます。3人ほどの学部教員が授業をいたしました。非常に、保護者あるいは生徒、それから附属学校の先生方等々から高い評価をいただきましたので、これについては、今年度も引き続き計画をしていこうというふうになっております。

その取り組みにつきましては、クリーム色の総合的研究の第4章のところに、今、申しました、学部教員が附属学校において授業を試みるという、そういう取り組みが第4章のところに詳しく報告されておりますので、これもご覧になられたかと思えます。これが10番目の項目でございます。

それから11番目の項目は、本大学が連携協力を結んでおります天津師範大学がございましてけれども、その天津師範大学の附属中学校と、それから三重大学の附属中学校との交流というのが、17年度から始まっております。三重大学は天津師範大学と協定書を結んで、今年度から天津師範大学のほうに日本語コースを合作で立ち上げていますが、これを機会に、附属中学校同士でも交流の取り組みを進めたいということで進めてきております。

具体的には17年度の末、つまり今年の3月だと思えますが、附属中学校の教員が天津のほうへ3泊4日で行って交流をしてきたということで、その交流が今年度も続いておりまして、天津から先生2人、それから生徒4人が昨日から来られておりまして、ちょうど明後日の23日にロボコン、ロボットコンテストの大会があるようで、そこに天津の先生と生徒が参加するというので、生徒4人は今日、明日は附属中学校の保護者のところへホームステイするというふうに聞いておりますが、そういう、天津師範大学の附属中学校と交流が進んできているというのが、17年度に起こりました取り組みの1つでございます。

それから12番目、最後でございますが、三重県教育委員会、それから津市教育委員会との人事交流でございます。三重県、それから津市との人事交流につきましての協定書が結ばれているわけございまして、それが白表紙の附属学校関係資料の「協定書」という項目がございまして、この協定書のところに、1枚目のほうに、三重県教育委員会との交

流の協定書，それからその次に，津市教育委員会との協定書がございます。この協定書に基づきまして，16年度から人事交流を進めてきております。

例年のことですけれども，17年度も，私とそれから附属学校園，4校園をまとめたの人事交流の担当者がございますけれども，その方と，県教委のほうへお伺いをいたしまして，人材政策室のほうへ行きますと，円滑な交流が実現されますようお願いに行っていました。今年も来週29日の予定でございますけれども，私と，それから附属学校の人事交流の担当者と一緒に，県教委のほうへ出かけて行って，附属の現状をお話して，そしてこういうふうな交流をお願いしたいという，こちらの学部としての希望をお話して，それで県のほうと次年度の交流が円滑に行われるようにしてきているということでございます。この件では，大変，県教委さんにお世話になっているということでございます。

以上，本当の概要でございますけれども，17年度にどういうことが，附属学校園関係で行われたかということのご説明を終わりたいと思います。あと，16年度，それから18年度につきましても，連携推進協議会の報告の中に，項目だけあがっておりますので，文言を見ていただければ，だいたい，どういう内容だったかということがお分かりかと思っておりますけれども，今日は17年度の評価ということで，17年度の12項目につきまして，ご説明をさせていただきました。まだ，他にもいろいろな取り組みがあるかと思っておりますけれども，ご質問も後であるようでございますし，その中でまた触れるところがございましたら，触れたいというふうに思っております。以上で説明を終わります。

**【司会 - 蓮尾】** ご質問をお受けいたしますが，如何でしょうか。それではここで，全体の日程をご説明申し上げます。最終的には16時20分に閉会ということで，目途を付けております。まず，座談会は13時55分からでございます。現在，少々予定時刻から遅れております。座談会の後，休憩を15時15分から10分間ほど取ります。その後，15時25分から，学外委員の皆さまによる評価のまとめを30分間ほどお願いいたします。そして，15時55分から，学外委員の皆さまからの講評をいただきます。最後に，学部長から学外委員の皆様に謝辞を申し上げることになっております。以上でございます。

それでは，事前にお送りしました資料等について，沓張委員から事前質問をいただいておりますので，附属学校を代表して回答をお願いいたします。宮崎附属小学校長，お願いします。

**【宮崎附属小学校長】** 沓張委員より，ご質問を6ついただいております。その事前質問事項が委員の方々の席に配付されております。6つのご質問につきまして，特に私からは1番と，それから3番と4番について，私のできる範囲でお答えをさせていただきたいと思っております。あとの質問に関しましては，あるいは私がお答えいたします1，3，4についての追加というふうなことも含めてでございますけれども，附属小の副校長から回答をさせていただきたいというふうに思っております。座らせていただきたいと思います。

まず1番ですけれども，各学校園の校長，それから副校長，教頭の具体的な職務内容，それについてのお尋ねです。また，それがどのように当該職員，あるいはその他の職員に周知されているかということですが，「国立大学法人三重大学」と，そういう組織の下にある附属学校，そういう性格からしまして，一切の事柄の責任と権限はその設置者である大学長にあるということになるかと思っております。しかし，各附属学校園のレベルにおきましては，その責任と権限はその校長，あるいは園長にあるというふうに認識しており

ます。これは法令によっても定められております。学校教育法には、校長は校務を司り、所属職員を監督するというふうになっておりますが、そういうふうな規定からでございます。

一方で、附属学校園の校園長、これは大学の教員でありまして、併任という形になっております。そういうことで、校園長の職務は現実には副校園長に委任されて学校運営がなされています。それが現実であろうというふうに思います。私の場合、小学校でございますけれども、例えば濱田副校長は、津市の小学校長会に出席をしておりますけれども、それも1つの表れかというふうに思っております。

ただ、誤解があってはいけませんので、申し上げますけれども、これはそういう面でのことでありまして、その責任に関しては、もちろん、委任しているというわけではございません。最終的には、すべてのことについての責任、これは校園長が負う、私が負うと、そういうふうに認識しております。校長が全責任を負うということでございます。

それから、先ほど、併任ということを申し上げましたけれども、大学での仕事がある場合、現場にすることができない、そういうことがありますけれども、その間のことにつきましては、常に副校長から適宜、適切な報告を受けて対応しております。

それで、校長の職務というのは、大きく言って3つに分けられるのではないかと思います。それらはまず第1に、先ほども言いましたけど、法令等によって規定されております職務というのがございます。それから2つ目に、三重大学の学長が校長に委任している、あるいは命令した職務というのがあります。それから、3つ目に、日常的な基本的な職務ということに分けることができるかと思います。

最初の、法令等によって定められております校長の職務には、例えば教育課程の実施、あるいは評価に関するもの、あるいは就学、入学、進級あるいは卒業に関するもの、あるいは児童の安全に関するもの、そういうふうな事柄が含まれようかと思います。それから2つ目の、学長からの委任という、あるいは命令した職務ということにつきましては、例えば所属の職員の出張命令、あるいは勤務時間、あるいは休暇等に関するものが含まれております。

さらに、最後の日常的な職務、基本的な職務ということですが、これは、例えば学校運営全般に関して、副校長および教頭、職員に対する指導、あるいは助言、それからまた4附属学校園の運営委員会というのがありますけれども、そういう会議とか、それから附属学校の場合は全国附属学校連盟というのがありますが、そういう会議への出席、さらに、学部との連携推進に関すること、こういう事柄が日常的な職務の中に含まれるかというふうに思います。校長の職務に関してはそういうことでございます。

次に教頭の職務ですが、これに関しては一般の学校と大きく変わることはないというふうに思っております。これも法令で規定されているとおりで、それに準じて、教頭は校長、副校長を補佐し、校務を整理し、そして児童の教育をつかさどる、ということです。そういう事柄が教頭の職務というふうに考えております。

それから、職務内容の、当該職員および他の職員への周知ということですが、校長に関しては、振り返ってみまして、前任者との引き継ぎにおいて初めて、おおよそが分かるというのが率直なところかなというふうに思っております。それでも、細かいところまでは当然のことながらよく分からず、実際に赴任してからその職務内容をだんだんと認

識して、そして理解を深めていく、とういのが実情であろうかなというふうに思っております。これは私の経験から申し上げますことで、他の3校園の校園長さんの場合には、当てはまらないかもしれませんが、振り返ってみて、私の場合は今、申し上げたようなところではなかったかなというふうに思っております。

それから副校長、教頭の職務内容についてですけれども、副校長、教頭は公立学校の校長、それから教頭、あるいはそれに相当される方が任用されているわけでありますから、そういうことから、基本的な職務内容については、本人は十分に理解をされているというふうに考えることができるかと思っております。

それから管理職の職務内容、これを他の教員にどのように周知させているかということですが、これは特にはっきりした明示的な形で、他の職員に周知をしているということはありません。しかしながら、基本的には公立校における校長、教頭の役割と同様であるわけで、そのように他の職員には認識されている、理解されているというふうに考えております。これが沓張委員の1番目のご質問に対しての、今の段階でのお答えでございます。

次に、3番目の附属学校園の構想、ビジョンということについてです。これは本当に大きな、本当に大切な、そして取り組んでいかなければならない、そういう点のご質問でございます。

資料の中に、教育課程検討委員会の平成17年度の報告がございますけれども、これは3年目で、ちょうどその時、私は赴任してすぐに委員長を務めさせていただきました。この委員会には入学者選抜部会、学力向上部会などの外に、領域部会が7つあって、その中で、附属学校園間のかかわりを深めていこうとする中で、4校園が考え方や思い、大切にしているところをお互いにつき合わすことによって、だんだんと附属学校の教員、あるいは附属学校園というレベルでの帰属意識というのが高まってきているというふうに私は考えております。そういう中で、先ほども上垣学部長補佐からもありましたように、子どもたちの交流と、それを立案する中での教員間の交流を通して、お互いに各校園の考え方というのが、違いも含めてですけれども、分かってきつつあると考えています。これは、やはり以前と比べると、大きな変化であったというふうに考えられます。ですから、そういう形で附属学校園が、そこでの十数年の教育を一貫した教育とすることを目指して、お互いの教育に対する思い、あるいは考え方、そういうことをできるだけ共有するような形で進んで行くことが大切な1点であろうかというふうに思っております。

それからもう1つ、附属学校というのは、大学との連携ということこそが一番大事なことの1つであろうかと思っております。これが一番特色を打ち出すことができる1つの側面、大きな側面であるわけで、そういう観点からの取り組みを進めて行く必要があります。先ほどもありましたように、学部教員が附属学校に来て授業をするということが昨年行われ、今年度も予定されておりますけれども、そういった連携を通して、大学は附属にどういふふうな附属であることを求めているのか、附属は大学の教員養成にどのように積極的にかかわることができるのかといった側面も、これからビジョンを考えていく上では、非常に大切なことであろうかと思っております。

先ほど、学部長補佐のほうから、学部長を中心とした将来構想特別委員会のことについてお話がありましたけれども、実は附属の校園長と、それから上垣附属学校担当学部長補

佐，そして学部長を交えて，昨年 10 月より，これは本当にインフォーマルな形ではありませんけれども，懇談の時を 2 カ月に 1 回持っております。そこでいろいろな附属の課題，例えば学級定員のこと，施設のことなどを考えていく中で，学部長はずっと以前からお考えになられていたことであろうかと思えますけれども，附属の将来構想をある形で出していくことによって，学級定員の問題も，それからまた施設の問題も，何とか解決できないかということが出てきまして，この 10 月の教授会で附属の将来構想を考える特別委員会が設置され，2 月にそこでの協議の報告あるいは提案がなされると聞いております。これには 6 名の委員の方がおられ，学部長を委員長として積極的に進めていただいているということがございます。学部から 4 名，附属のほうからも校園長が 2 名参加しております。また，必要に応じて 4 校の副校園長が全員それに出席するというふうな形でなされているということがございます。附属の将来構想を速やかに検討し，それを展開していくことが緊急の課題であると痛感しております。

次に，4 番の 4 校園間の教員人事交流，それから学部教員との人事交流についてのお尋ねについてです。4 校園の人事交流は，制度的にはまだありませんが，しかし試みは始まっております。例えば中学校の英語教員が小学校の研究会に参加し，国際理解教育，あるいは英語授業について共に議論をし，考え，そしてそれを受けて今度は今年度の 6 月から各学年，1 カ月に 1 回ですけれども，国際理解教育ということで，A L T（外国語指導助手）に来てもらって，1 年生から 6 年生まで授業をしております。それも，まずは最初のときに，その中学校の教員と A L T が 2 年生と 6 年生の授業を行い，それを附属小の教員が参観して A L T との協同授業に備えるということもございました。制度的にはないわけですけれども，もし，ある教科で，すべての教科というわけにはいかないでしょうけれども，併任発令が学校間でなされるということが可能であるならば，附属間の人事交流は可能かとは思います。そういう形で進んで行くということは今後大いにあり得るし，それを私は望んでおります。

それから，大学教員とのそういう交流については，先ほどもありましたように，大学の教員が来て授業をしていただくというふうなことはございますけれども，人事交流，組織的な人事交流というのは，今のところはないと認識しております。以上，私のほうから説明させていただきました。

**【司会 - 蓮尾】** それでは，濱田附属小学校副校長お願いします。

**【濱田附属小学校長副校長】** 続けて，附属校園の主幹校が小学校ですので，副校園長を代表して附属小学校の副校長をしております濱田がお答えさせていただきます。2 番と 5 番の問題について，お答えさせていただきます。

まず 2 番の，いわゆる附属学校園の魅力をどのような形でアピールしているかということです。この問題は，私はとても附属校園にとって重要な問題だというふうに認識しております。と申しますのは，法人化をいたしまして，私ども自身の力で附属学校園をさまざまに運用していかなければなりません。最終的には，児童，生徒が来てくれないことには，附属学校は成り立っていかないわけですから。保護者や子どもたちに選ばれ続ける学校であることが，非常に重要な問題だと思います。そのことをこの 2 番目のご質問の中で，沓張委員がおっしゃられているんだらうなというふうに認識をしております。

選ばれ続ける学校であるということを考えていきますと，私も公立校にいたときは，学

習者基点であるとか、学校経営品質であるとか、そういう考え方を学ばせていただいたんですが、附属学校にとってもその考え方が極めて重要だなというふうに思います。そういう点で、どのようにしてアピールをしているかということをお願いしたいと思います。

特に、保護者や子どもたち、それから関心のある方など、いろいろな方がおられますので、入学者選抜の機会を中心に様々なことに取り組んでいます。例えば、学校説明会を行ったり、先ほど上垣学部長補佐からありましたように、子どもたちの体験入学などです。昨日、小学校の子どもたちが半日、中学校で先生方の授業を受けて実際に体験をするというふうなこともございました。また、附属養護学校では、保護者対象の電話での教育相談をするとかいうこともあります。それから、幼稚園の場合ですと、学校説明会の規模をもっと大きくした形での幼稚園の見学会を行っています。それを5月、6月、7月に、毎月1回ずつやるとかというふうにして、それぞれ関心がある方、あるいは保護者や子どもたちに理解を深めてもらおうと、そういうふうな試みしております。

それから、附属養護学校の場合は、県下からさまざまな障害を持つ子どもたちの入学があるわけですので、各地教委へ副校長が出向きまして、地教委の担当者に学校の特性、あるいは教育相談のシステムであるとか、就学についてなど、附属養護学校のことを説明しております。

もう1つは教員の問題であります。5番目の人事交流の問題にもかかわるんですけども、教員にとって魅力のある附属学校でなければならない。特に、県の先生方にとっても教育・研究の参考にしている機会ですので、そういう意味でのアピールというのが大事なんだと思います。ここでは公開研究会ということを書いていますけれども、それ以外にもさまざまなことを行っています。先ほど上垣学部長補佐が申しましたように、初任者研、5年研、10年研、あるいは公立学校の様々な研修会、それから総合教育センターの研修講座等、できる限り附属学校としては派遣をさせていただいております。そういう中で、少しでも公立学校の先生方にも理解を深めていただくというふうに思っています。しかし考えてみますと、私たちにとっては今申し上げましたような様々な機会そのものが附属学校園をアピールすることになるのだと思います。

さらに、人事交流の場におきましては、副校長が県教委の人材政策室の了解をいただきました上で各地教委を訪問させていただいて、各担当者に附属学校の特色をプレゼンテーションさせていただきます。先ほどの外部評価資料の1枚目に、カラー刷りの裏表、これも昨年度とほぼ同様の中身を各地教委へ行きましてプレゼンテーションをさせていただきました。こうやって、附属学校を紹介させていただいているということです。

また、大学の広報誌に、『ウェーブ三重大』というのがありますし、『えっくす』（三重大X）というのがあるんですけども、附属学校園の紹介も必ずしていただきまして、対外的にもアピールしています。

以上申し上げましたように、附属学校園の魅力をアピールしています。もちろん十分にアピールが出来ているとは思っていません。保護者にとっても、先生方にとっても、附属学校園の魅力のある点をアピールしていかないと、附属学校園は成り立っていかないという認識をしております。

それから5番目の人事交流の問題であります。附属学校にとっては、人事交流が大きな生命線だというふうに認識をしております。つまり、県教委との人事交流をしていくこと

で、附属学校そのものが活性化をしてきております。全国的に見ますと、人事交流のない附属学校もあります。しかし、三重県の場合はこうやって人事交流をさせていただくことによって、学校の中が活性化をしてきているように思います。この点はやっぱり、非常に私は大事な点だと思し、県教委の理解があって初めて成り立っているシステムだなというふうに思っております。

それでは、どういう形の人事交流なのかということです。基本的なところは大学と県教委との協定書で理解していただいていると思います。ただし、人事のことですので、あまり具体的に申し上げられない部分もありますが、若干補足をさせていただきます。基本的には附属の担当者が、県の人材政策室と人事の基本方針を確認します。その上で、具体的な転出入の交流人事に入っています。

小学校の場合で言いますと、教科研究が基本になっていますので、人事交流の中で、具体的に教科名やお願いしたい後任者の方々を提示させていただくなどして、基本的なスタンスを明らかにして人事交流をさせていただきました。その結果、昨年度はとてもスムーズに人事交流を進めることが出来ました。

また、附属学校園全体でいくつか人事交流の課題がありますが、少しずつ解決の方向に向かっていくように思います。

そんな形で人事交流をしていますが、附属の主体性という問題については、私どもは交流人事についてはっきりと県教委に示させていただいた上で進めていくのが大事であると思っております。もちろん、この人事交流が完全に百パーセント、今、ベストなのかと言いますと、いろんな課題も残っております。その点に関しては、また今後、県教委という話し合いをさせていただきながら、少しでも解決の方向にいったらなというふうに考えております。

主に2番、5番の問題を説明させていただきました。6番の問題は村田チームリーダーからお願いします。

**【司会 - 蓮尾】** ありがとうございます。それでは、村田チームリーダーお願いします。

**【村田チームリーダー】** 附属学校チームの村田でございます。6番目の質問事項につきまして報告させていただきます。附属学校園の予算編成でございますが、法人化になってからは運営費交付金が国の時の校費でございます。また、事務組織が一元化になりまして、附属学校チームが窓口になり財務部管理チームが予算執行等の担当になっております。

次に、附属学校の予算運用ですが、園児・児童・生徒の保護者から徴収します教育後援会費です。この費用は、大学に寄附金として納め、各附属学校が使用することになっています。それと学校預かり金でございます。これには育友会費、教材費、学級費、給食費及び旅行積立金等がございます。また、運営費交付金につきましては毎年、前年度の予算に対して1%を減額した予算が配分されます。執行につきましては、各附属校園長等の管理職の指示に基づきまして、各校園に配置の事務職員が電算入力を行い、事務局から支出をしております。

附属学校チームリーダーの職務内容、位置付け、役割等でございますが、一言で申しますと、附属学校チームの事務の統括、各校園の懸案・要望事項及び諸問題についての対応・調整、諸会議等に参画させていただきまして運営面での連絡調整・報告ということです。また、このような職務の中で、各学校園に配分された予算では対応できないような各学校

園の施設・設備の新設・改修・修繕等の工事及び物品の購入・修理につきましては、事務局等への申請とか概算要求，営繕要求を行っております。

また，それ以外にも服務上の諸問題があるのでございますが，これにつきましては，管理職の先生方と連携を綿密に行い調整させていただいております。

【司会 - 蓮尾】 それでは，丹保学部長，お願いします。

【丹保学部長】 ちょっと付け加えます。今，最後の6番目のところ，村田さんはちょっと，自分で言いにくかったんだと思いますけれども。ここ数年で事務サイドが非常に強化されました。というのは，今はいわゆる事務長クラスなんです，村田さんは。その前は，事務長補佐だったんですね。その前は係長クラスが一番トップだったんです。こういうふうに附属の組織が，事務的に非常に強化された。トップがそういうふうに変るということは，そういうことを意味しているというわけです。本人は多分言いにくかったと思いますので，私のほうから代わって申しました。

【司会 - 蓮尾】 それでは引き続き，座談会に入ります。司会の不手際で申し訳がございません。大変，時間が押し迫っておりますので，2点お願いいたします。1点目は，先ほどお願いしましたように，発言される方のお名前を確認させていただきますので，挙手でお願いをしたいと思います。それからもう1点は，簡潔にお願いしたいと存じます。それでは沓張委員，よろしくお願いします。

【沓張委員】 質問事項ということで，決して暇ではないんですけれども，この日のために，かなり雑ばくな6点の質問をさせていただきました。

ある意味では，20年ほど前に，15年間ほど附属で勤めさせていただいた内容と重なるところもあるんですけれども，私が見る限りでは，非常に様変わりしたなという部分が随所に見られるということもありまして，いろいろとお聞きしたい点ということで，こういう事項にまとめさせていただいたことが，何か，非常に，やらせじゃないかというような雰囲気には，ひょっとしたら聞こえたかも分かりませんが，全くそんなことはありません。

私の，まったく個人的と言いますか，大量の資料を頂いて，大学の資料から教育学部，そして附属の資料をですね，興味が私もあったわけですから，好奇心もあったわけですから，見せていただいた中で，この6点ほどにしたんですけれども。ずいぶんとご丁寧に，6点にわたって，また，上垣学部長補佐から全体的なことをいろいろお聞きしたこと，本当にありがとうございました。

その中で，私，やっぱり一番大事に，濱田副校長も，それから宮崎附属小学校長も言われた中に，魅力あると言いますか，将来構想にわたって，これから生き残る附属学校園がどうあるべきかということについてのビジョンなりミッションの形で検討されている。将来構想特別委員会という委員会を設置されて，かなり議論をされているということで，本当に，いわゆる新しい展望が見えるなということを感じるんですけれども。

ただ，やっぱり，内々の固めの中で，管理職が教職員の場合，自分たちが今どんな状況の中に評価されて，評価しているのかというあたりの自己評価と言いますか，学校評価というものが，具体的にどう動いているのか。それに勤務評定なんていうことが，いわゆる法令できちっとされていますけれども，地教行法に類するような勤務評定を，どう附属学校園内ではやってみえるのかなというのは，まだちょっと不透明なところもあります。

そんな点を踏まえて，私，この6点ほどにまとめた中で，やっぱり一番気になるのは，

魅力ある附属校園が、それぞれの学校の資料を見せていただいて、正直言って、ばらんばらんとは言わないんですけども、まだまだ、その中身を4校園のレポートを見せていただいて、つながりが非常に見えてこない。そんな点から考えると、もっと全面的に出していただいたほうが良いのかなと思います。

1点だけ、自己評価、学校評価という形で今、具体的に管理職を含めて教職員がどういう形で実施されているのか。公立学校ではかなり、そういった学校評価、自己評価ということについて、ずいぶんと力を入れられてきているわけですけども、お聞きしたいなということです。先ほどの6点の説明に対してのお礼が長くなりましたけれども、聞きたいのはその1点を、まず聞きたいです。以上です。

【司会 - 蓮尾】 ありがとうございます。では、宮崎附属小学校長、お願いします。

【宮崎附属小学校長】 宮崎です。今、沓張委員がおっしゃられたことを正確に受け止めているのかどうか分かりませんが、学校管理職の評価、教員からどのように評価されているかとか、指導性をどのように評価されているとか、そういう評価でしょうか。ちょっと違いますか。よろしいですか。

【沓張委員】 いえ、管理職とかそういう質問ではなくって、いわゆる学校教育目標に向かって、管理職なら管理職、教職員なら教職員、保護者なら保護者というような評価をどのように求めて、いや、やってみえるのかということでございます。

【宮崎附属小学校長】 じゃあ、平見先生のほうからお願いします。

【平見附属中学校副校長】 附属中学校の平見でございます。教育課程検討委員会の中に、今年から教育評価部会を設けました。それまでは教育目標部会ということで、4校園の目標について検討してまいりましたが、本年度からそのスタイルを「教育評価」ということに目を向けまして、教育評価部会を設けました。

ですけども、この間も第1回の会合を持ちましたところでございますが、平成17年度は、それぞれの4校園で、それぞれの学校のスタイルに合った学校評価をやってまいりました。あるところでは、保護者にアンケートを取った。それから、子どもにもアンケートを取った。それから、あるところでは校内の職員だけが17年度の反省を行ったというような、そんなところで、足並みがまだまだ揃っていない現状を出し合いました。

それで、今回、外部評価ということで教育学部のほうから、附属学校園の外部評価を受けさせていただきましたので、またこれも参考にさせていただきながら、18年度の評価についてそれぞれが考え、そして2月ごろに交流し合って評価の形を作っていこうということになっているところでございます。

公立学校さんから見ますと、大変遅れているところでございますが、一歩ずつ話し合いを進めている、それが現状でございます。回答になりましたでしょうか。

【司会 - 蓮尾】 よろしゅうございますでしょうか。沓張委員、何かご意見などございましたら、どうぞお願いします。

【沓張委員】 これはお返ししてもいいですか。

【司会 - 蓮尾】 何かございましたら、どうぞ。

【濱田附属小学校長副校長】 ちょっと追加でよろしいですか。配っていただいた資料の中に、中期計画・中期目標の18年度の業務実績報告というカラー刷りのものがあります。これは本年度、今、進めている学校園の様々な取り組みに対し、自己評価をして、学部の

ほうへ提出をしまして、最終的にはこれで全学での評価をしていただくというふうなことになっております。それぞれがどの目標に対して、中期目標に対して年度目標を立てて、それが今どこまで進んでいるかという進捗状況が、この中には出ております。

沓張先生がおっしゃられるような統一感であるとかという問題に関しては、その辺りのところが十分にこの中にいきているかと言われますと、平見副校長が申しましたような今後の大きな課題としてあります。それぞれが、個別にこういうことをやっているということは言えても、統一感という点に関しては大きな課題であるということを認識しております。

【司会 - 蓮尾】 ほかに、よろしいですか。それでは、沓張委員、お願いします。

【沓張委員】 沓張でございます。丁寧なご説明の中で、中学校の平見副校長のレポートもさることながら、こういう形で、ある程度、年度別に、文言じゃなくて、数的な面で表されるものというのは、これは最近の県教委が非常に、きっちりと学校に提示を求めて、そして提示することによって、その中の学校という組織体の管理職をはじめ教職員が、自分たちが今、課題とする数値をきちっととらえて、さらに目指す方向は何かというスタイルを作っているように思います。この3月まで、平見副校長が県教委の教育事務所におられたということもあるでしょうけれども、そのスタイルを非常に作っていただいているんじゃないかなと思っています。他の3校園とは、ちょっとひと味違った形のご提案と言いますか、レポートだと思っているんです。

数字そのものについての信憑性とか、これから各校にそういう数値というのはいろいろあるでしょう。でも、私たちにとって、これを見せていただくことは、今、中学校でも、小学校、養護学校、幼稚園でも、こういう形で1つ1つのものを具体的に示していったら、これを外に示すと同時に、自分たちの中で示していただくということで、私はこういった形のレポートも、つまり報告文書としてまとめていくというのも、非常に大事なことだと思っています。

こういうスタイルをお互いが求め合いながら、それこそ自分たちの附属校園全体としては、こういう在り方で相互に情報交換をし、それを知ることが、まず連携の第一歩だと思います。その点は今の説明の中で、濱田副校長は、18年度の年次計画、計画および業務目標に対する報告書を、報告のパーセントで表していただいたのも、カラー刷りの資料でご説明いただいたんですが、それぞれの学校の教職員に周知徹底して認識させているかということが、まず、この目標を達成していく最大の仕事だと思います。そして、外目に公表するのも大事だし、内々の職員に周知徹底するという意味では、こういう作業を通して周知徹底するというのが一番大事なかなと思っています。以上です。ありがとうございました。

【司会 - 蓮尾】 ありがとうございました。どうぞ、山口委員、お願いします。

【山口委員】 県の教育委員会の山口です。沓張委員のご意見と関連しまして、先ほど、濱田副校長が言われましたけれども、この業務実績報告を見ますと、大学の学部のレベルとかなり、附属校園の目標なり業績報告が、非常に粗くございましてですね。学部は何%とか、いろんな数値目標をきちんとされながらやられているということで。私も実は、文科省の協力者会議で、学校評価に行かせていただいているんですが。要は、何が言いたいのかと言いますと、学校評価について、あらかじめ過去のデータを分析した上で、目標を

定めて、そしてそれを実践し評価、改善していくということが大事なのではないかなと。先ほど、平見副校長が言われました、保護者アンケートとか生徒アンケートとか教職員の自己評価だけでは、アンケートは評価にはならないんですよね。漠然としておりました。

例えば、本日の資料をいただいた中に、教育課程の編成状況はどうだとか、教科等の指導の状況はどうだとか、学力・体力の状況はどうなんだとか、あるいは生徒の出席状況とか不登校の状況はどうなんだとか、学校組織運営の状況はどうなんだとか、そういうことが過去の積み上げを持ちながら、それで保護者なり、あるいは生徒たちに情報を返して、透明度を高めて、自分たちはここまでやります目標を定め公開し、実践し、自己評価をした上で学校評価を受けるのが本来の評価でないかなというふうに思っているのです。多分、データはいっぱい、学校の中にあると思うんですね。遅刻、欠席のデータもあると思いますので、それをうまくデータ化して、より良い明日への改善に繋げていただければなと感じました。

2つ目は、外部人材の活用ということで、学部の先生が、医学部からも来ていただいているということですが、それ以外に外部人材の活用状況をお教えいただければという点が2点目です。

3点目は、他大学の附属学校で、どのような取り組みをなされているかということで、大学教員と一緒にあって、先進地視察などはやられているのかどうかということが3点目です。

4点目は、教育課程の報告、ピンクの冊子を見せていただいて、今日の授業でも感じたんですが、委員の中でも「附属学校はこれでも学力が高いだろうな。」ということは話をされて、「多分、高いと思います。」と私、答えさせていただいたんですが。心の教育の中で、聞く力を大切にしようということを目指されて、去年1年間取り組まれた部会があるようなんですね。その割には集中力というのは、これは一般公立小中学校よりは随分高いと思うんですけども、もう少し、集中力という部分が、全体にまだ十分じゃないのかなというので、その辺りの取り組み状況も教えていただければと思います。以上です。

**【司会 - 蓮尾】** ありがとうございます。それでは、濱田副校長か、宮崎校長にお願いいたします。

**【濱田附属小学校長副校長】** 今の学校評価の、過去の積み上げを持ちながら自分たちはここまでやります、という問題に関しては、その辺りのところは十分ではありませんので、今後は十分に検討をしながら、4校園の学校評価の中で十分生かしていきたいなというふうに思います。

外部人材の活用という問題ですけれども、様々な形で、例えば実際来ていただいて授業をやっていただく。この前も附属小学校のほうでは車椅子体験授業を4年生がやりましたが、鈴鹿のほうの施設の方に何人か来ていただいて、一緒に交流学习をしました。また、様々な企業の方、例えば去年は日本捕鯨協会というのがありまして、そこへ応募をして出張授業をしていただきました。今年もいろんな計画が進行しています。もちろん、今年度も教育学部の先生にいくつか出張授業をしていただきます。この点も教育内容を充実していく上において、とても大事な視点であるというふうにも認識しております。今後も充実した外部人材を活用しての授業を考えていきたいなと思います。

3番目の、他大学の先進的な取り組みに関してですが、全附連などの会議でいろんな実

実践報告を受けますが、学校評価について、山口委員がおっしゃるような形での評価、外部評価に関して、附属学校の中での事例は、まだ、私は直接的に学んでおりません。今後、研究をしていきたいと思えます。

最後の、「聞く力を大切に」ということですが、十分に育て切れていない状況があると思えます。心の問題も含め、その辺のところは附属学校も、公立校とある部分では同じような問題を持っていると感じています。生徒指導上の問題も然りですし、それから不登校の問題もそうです。聞く力ということとは少し離れていますが、例えば中学校と小学校は、現在スクールカウンセラーに毎週1回来ていただいて、小・中でそれぞれ半日ずつ相談業務などをしていただいています。子どもたちからの心の問題や、あるいは保護者の方の相談も結構あります。小学校でも、スクールカウンセラーがいることの意義は大きいなど、あらためて感じているところです。

【司会 - 蓮尾】 平見副校長、お願いします。

【平見附属中学校副校長】 平見です。今のお話の中にありました中学校の様子について、「聞く力を大切にしよう」という、その辺りでは、やはり授業の在り方が一番問題かなということを考えています。生徒たちが集中するのも、集中できないのも、やっぱり授業の進め方だと思うのです。中学校でも指導力を付けようということで、それぞれの教員が一生懸命、研修に励んでいるところでございます。今日、見ていただいた様子についてお聞かせ願いたいと思えます。よろしくをお願いします。

【司会 - 蓮尾】 清水副校長、お願いします。

【清水附属養護学校副校長】 附属養護学校の清水です。学校評価につきましては、附属養護の場合は、経営品質的なこの8つのカテゴリー等、いろいろ検討したわけですが、なかなか、何をどのように図っていくかというところで、思わず1年経ちまして、2年目に突入しているわけですが、特に子どもの、普段でも子どもの変化が、何かにつけ表れにくいといったところで、数値的な要素をどのようなところで打ち立てられるのか。そんなことが非常に課題になっております。その他、個人評価とか全体評価、そこら辺のバランスも、幾つか試みてはいると、そういった状況でございます。

外部人材につきましては、いろんな方をお呼びして、例えばインド出身の方に来ていただきカレーを作っていたりとか、ウィーン在住のオペラ歌手に来ていただいて、オペラ劇場をしていただいたり。それから、ボランティアの方で簡単な音楽会を開いていただいたりとか、かなりの数、外部の方に来ていただいて、子どもたちの前で何かパフォーマンスをしていただいているという実績がございます。

ベンチマーキングにつきましては、先生方に、やはり先進的な取り組みをしていると言われる研究発表会と、各小学部、中学部、高等部、必ずどこかに行くという形で実践しております。

それから、聞く力うんぬんでございますが、見ていただいたとおりの特質がございますので、そういった点につきましては、また違った視点でもって、人とのかわりを育成するよう努力しているところでございます。以上です。

【司会 - 蓮尾】 それでは最後に、北谷副園長、お願いします。

【北谷附属幼稚園副園長】 北谷でございます。いろいろお聞かせいただき、ありがとうございました。幼稚園のほうは、学校には少し遅れて自己評価、学校評価ということが

考えられているような状況です。それですので、附属幼稚園としましては、できるだけ県下の幼稚園の先生方に、参考にしていただくような形で雛型を示すことができるといふふうに考えておきまして、学校評価、自己評価の項目、公表方法、評価の生かし方等、試行と実践に取り組みつつあるところでございます。

先ほど聞かせていただきました「過去のデータを分析して評価した上で、今年目標計画を」という考え方をお示しいただきましたことは、とても参考になりました。もう1度考えていきたいと思っております。

それから、外部人材の活用状況につきましては、幼稚園というところは、本当にさまざまな方々とのかかわりがなければやっていけないというような状況にありまして、教育学部だけでなく、これは外部とは言えないかもしれませんが、工学部の先生方や学生、それから医学部の方との繋がりも大事にしております。それから、地域の方に、例えばサツマイモや稲の育て方を教えてもらうというようなこともあります。また、NPO法人の方と協力し、建築土木関係の廃材を利用して幼稚園のビオトープができるなど、かなりいろいろな方面の方々と協力し合ってやってまいりました。これからも大いに外部人材と繋がりを深めていきたいと考えております。

そして、心の教育の問題ですが、幼稚園は基礎の基礎というところで、人として大事な部分を育てていることを意識しながら毎日保育をしております。成果が目に見えにくいと言う点で、なかなか難しいところがあります。また幼稚園は、家庭教育と密接に繋がっておりますので、保護者との関係ということでも年々難しさを感じております。「子ども・保護者・幼稚園が共に育ち合いたい」、その辺りにまだまだ課題がいっぱいあるなということを感じるところでございます。

【司会 - 蓮尾】 ありがとうございます。それでは、田中委員、お願いします。

【田中委員】 津市の田中です。まず、今日、授業参観をさせていただいた感想を言わせていただきます。流石に、附属の先生というのは確かな教育技術を持っておられ、それはいつ見せていただいても変わらないな、ということを感じました。

最初に幼稚園に行かせてもらったら、中学生が来ていて、いろいろと保育についての勉強をし、幼児と一緒に遊んでいました。幼稚園の子どもも、お兄ちゃんやお姉ちゃんと一緒に遊ぶ中でまた違った経験をしている、とても良い姿だなと思いました。先ほども説明をお聞きしますと、小学生が中学校へ行って、中学校を一日、半日ですか、体験入学をしたというようなこともお聞きしました。まさに附属学校ならではのことをやっておられる。そんなことも見たり聞いたりする中で、これからもそういうことは、もっともっと活発に行っていていただく必要があるんじゃないかな、ということを感じたわけでございます。

それから先ほどのご説明の中で、やはり附属学校が魅力ある学校・園をつくることに、今後最大の努力をしなければというようなお話があったんですが、本当に今はどうなんだろうということですね。私がいろいろ聞いたり感じたりしていることは、率直に申し上げて、昔からのイメージもあるんでしょうか、親、そして子どもというのは附属学校に非常に魅力を感じているんじゃないかと思うのです。

ところが、一般学校の教員にとって、附属学校というのはあまり魅力がないんじゃないかなと。と言うのは、人事異動のときに「あんた、今度、附属へ」というようなことを管理主事が言うと、スムーズに「はい、ありがとうございます。行かせていただきます。」と

言う者は少ないようですね。どうもかなり難航して、やっと説得して、でも最後まで抵抗してそれが成功しない、そんなことも聞いたりする中で、一体それはどこに原因があるのか、その辺を今後よく検討していただきたいなと思うんです。

それはやっぱり、日頃からのいろんな交流と言うんでしょうか、そんなことにも問題があるんじゃないかなという気がするんです。言うなれば、まさに開かれた学校・園づくりをしてもらうことが必要じゃないかなと。確かに、公開のときは多くの人を集める。これも沓張先生がおられたところに比べると、ぐっと集まってくる人も少なくなったんじゃないかなというところもありますけど。でも、ほかの研究会よりは、やっぱり附属の公開は多く集まると思うんです。

普段のいろんな校内の研修、あるいはちょっとした教科の研究会のときも、内部だけじゃなしに「こんなことをやりますから、いっぺん、関心のある先生方は来てください。」と言うような、そういう度量の広さをも見せていただきたいなと私は思います。これは今日出がけにも、うちの指導主事に聞いたら、その辺のことを申しておりました。私と同じように考えているなということも思ったんです。

それと、人事の面で今後考えていっていただくのは、人事交流ですね。今、小学校は教科はあまり言わないので、割に広くいけると思うんですが、中学校なんかは教科で交換をするわけですから、ある地区とばかりやっていると思うのです。例えば、社会科だったら四日市からとか、数学だったら津からとかですね、そういうふうに固定をしている面もあるんじゃないかなと。もっとその辺を改め、広く交流をする、普段からそういった授業を公開する中で「よし、いっぺん、今度は附属に行って研究をして、そして実践を積んで、力量を付けて、また戻ってきたい。」という、そういうのも魅力ある附属学校づくりにも繋がるんじゃないかなと、そんなことを思ったりしました。あまり長くなるといけませんので、この辺りで終わります。

**【司会 - 蓮尾】** ありがとうございます。川北委員、お願いします。

**【川北委員】** 四日市の川北でございます。今ちょっと学校評価の話が出ましたので、ちょっと関連して一言、申し上げたいと思います。

四日市におきましては今、すべての小中学校、幼稚園も含めて、各学校の学校づくりビジョン、それから園づくりビジョン、こういうものを作りながら、毎年目標を持って学校経営、学校運営に当たっていると、こういう現状があります。その中で学校評価というものが各学校でされるわけですがけれども、一番の、やはり問題点は、学校の管理職が中心になってそういうことをやるわけですがけれども、なかなか、一般教員のほうまで、その考え方が伝わっていかないと。ここのところが非常に大きな問題があると。こういうことで、各指導委員が学校を回りながら、こういう指導もしているわけですがけれども。年々定着はしてきたかなと、そんな感じがしますけれども、まだまだ、これは努力しなければならんなど、そういう感じがしております。

附属の学校におきまして、そういう努力をされてみえるということですがけれども。私はこの2年ぐらい、この学校評価、これをやってきて、やはり行き着く先は、今、県が学校の経営品質という考え方の中で、学校の経営診断をしたらどうかと。これは先ほど話が出ましたけれども、8つのカテゴリーに基づいた学校の全体の経営診断、ここまで行き着きますと、やはりその学校の強みとか弱み、こういうものがかなり浮き彫りに出てくると。

こういうことも多少、経験上分かってきたと、こういう段階です。

ですから、附属の学校におかれましても、そこまで努力をしていただければ、1つの組織体としての経営ができるのではないかと、こういうことを感じましたので、一言付け加えをさせていただきました。

それから、こういうビジョンにかかわるのかどうか、ちょっと疑問ですが、今日、学校を私、初めて見せていただきまして、幼稚園から小中学校、それから養護学校まで、1つの敷地内にあると。こういう地理的な条件を生かせば、今、非常に小中一貫教育、こういうことが言われております。どこの教育委員会も、これからの小中一貫教育の在り方、こういうものの検討もしておりますけれども、なかなか先が見えてこないという現状も一方ではあります。

もしも、この地の利を生かして、この附属学校が小中一貫教育の、これをもう少し前に進めていただいて、何かのモデルになるようなものを作っていただければ、非常に、各教育委員会としても参考になるのではないかなと、こういうことを感じましたので、その点について、これからのお考えがあれば、一度教えていただきたいと、これが2点目です。

それから、今日一番強く感じましたのは、やはり小中学校とも40人と、こういう学級の数で授業が進められていると。特に中学生の場合は、もう体が非常に大きいですから、通路を歩く余裕もないほど窮屈そうに見えました。これは学級定数と言いますか、定員を今、考慮中というご説明もありましたが、この辺りについては今、少人数とかそういうことが非常に、公立では行われておりますけれども、その辺りのお考えがどうかと。また、教員自身は、その辺り、どのように感じてみえるのかなと、そういうことを感じましたので、また一言、お願いをしたいと思います。

それから1つ、もの凄く気になったことがございまして。公立の学校へ行きますと、生徒は非常によく挨拶をします。今日、中学校をずっと歩かせていただきましたが、面と向かって、挨拶をされる中学生というのが非常に少ない。こういうことを感じましたので、その点につきましては、ご配慮をまたお願いしたいと思います。以上です。

**【司会 - 蓮尾】** ありがとうございます。それでは回答を、丹保学部長、お願いします。

**【丹保学部長】** 今、ご指摘のあった中で、ビジョンについてですね。今、将来構想特別委員会のほうで検討しているわけですね。それで、なぜ、今ごろ検討かという話になりませんが。これまでは検討する以前の問題があまりにも多くて、検討にさえ入れなかったということです。例えば子どもの命を預かっているのに、耐震化構造が進んでいなかったわけですね。これで、過去3年にわたって小学校、中学校、養護学校と順次進めてきまして、現在、例の阪神淡路クラスの地震が来ても、管理棟の一部はまだ危ないところがありますが、他はもう大丈夫だということまで、ようやくいきましたし。

それから、待遇の問題も、かなりいろんなこと、待遇の改善がされてきましたし。それから、人事交流が進まなくて、出るにも出られないという悲痛な叫びがありましたので、これについても、少なくとも数においては、過去4年間、計算しますと、70何名という交流ができました。そういうことで、まだ問題となる状況がたくさんあるということは、ご覧になっていただいたと思うんですけれども。ようやく、将来構想について今、手を付けているという状況でございます。

今、ご指摘のありました附属の地の利を生かすということは、将来構想の、今、1週間

にいったん程度のスピードで行っているわけですが。それはぜひ、取り上げて、1カ所にあるという強みですね。これはもう、他の学部、他の中学校、小学校にはないわけですので、これは絶対生かしていきたいということで、これは大きな将来ビジョンの核になるのではないかというふうに思っています。

それから40人学級ですが、これ、国立の40人学級を守りなさいというのは、ずっと来ているんですね。一部の学校では、すでに40人学級を30何人学級とやっていますけれども、これはいろんな理由を付けてやっているわけですので、これについても今、検討中のところでして、いずれ、もう少し少ない数でやりたいと。それから、もうちょっと大きなことを、もう少し考えていかなきゃいけないというふうなことも思っております。以上、私のお答えできる点だけをお答えいたしました。

【司会 - 蓮尾】 それでは、附属学校園のどなたかにお答えをお願いします。平見副校長、お願いします。

【平見附属中学校副校長】 平見です。いろいろとご意見ありがとうございました。中学校では、先ほど言っていた挨拶のことと、それから自転車のマナーが悪いという、この2点は本校の大きな弱点です。挨拶運動も今、生徒指導や生徒会が中心になってやっているところですが、今日も、私も一緒におりましたけれども、お客様に廊下で挨拶をしていく生徒でも小さな声で頭を下げるぐらいで、面と向かってと言われたら、もう全然できていませんでした。また学校へ戻って、教職員と生徒にもその事を伝えて取り組みたいと思っています。ありがとうございました。

【司会 - 蓮尾】 それでは、宮崎校長、お願いします。

【宮崎附属小学校長】 宮崎です。ありがとうございます。いろいろご意見を聞かせていただきまして、本当にありがとうございます。今、中学校のほうからもありましたけれども、その点については小学校でも頭の痛い問題です。今日は私も中学校のほうをご案内する機会がありました。いつもだともっと挨拶をしてくれるんですけど、今日はどうしてでしょうか。恥ずかしかったのか知りませんが、十分に挨拶が出来ていなかったのではないかという印象を私も受けました。

実は、私自身は、小学校のほうもう少し、人と人を繋げる言葉ということで、挨拶を指導していかないといけないと思われる現状があるように考えていまして、もしかしたら、そういうお叱りは、私たちのほうのところで受けるべきだったのかなというふうに思っております。

それが1点と、それから先ほど、40人学級について一般の教員はどういうふうに思っているのかというふうなお話がありました。これについては、教員のほうは日記指導といったことも含めて、いろんな点で今よりももっときめ細かい指導をしたいという思いが非常に強く、定数が削減されるということが実現すれば、もっと充実した形で指導ができると教員たちは考えているということがございます。

【司会 - 蓮尾】 ありがとうございます。それでは、時間も過ぎておりますが、ご出席いただいております小林秀則様、それから古儀憲次郎様、小林芳子様、順にご発言をいただきたいと思っております。それでは、小林委員よろしく申し上げます。

【小林（秀）委員】 附属の学校、私、初めてお伺いさせていただきました。それで今、感じていることは、他の学校に比べて、附属学校が小学校、中学校、それから養護学校、

幼稚園という、この4つの学校園がうまく機能すれば、他の学校に比べて、やはり素晴らしい学校になるのではないかなと。そういう意味で、教職員が研究とか研修をするのには非常にいいんじゃないかなというふうな感触を持たせていただきました。

ただ、そのときに、私も中学校経験もありますが、例えば中学校の教員から小学校を見ると、よその庭はよく分かるんですね。というふうに、中学校から小学校を見て目標がどうなのか。もう少し目標をこうして欲しいとかいう切磋琢磨をして、お互いにオフサイドミーティング的なことをして、どこに良いところがあるか、どこに悪いところがあるかという、欠点と長所の出し合いをやられるということが、非常にいい雰囲気になるのではないかなと思いました。

今日、説明を聞かせていただいたんですけれども、的確に附属の学校はこういう目標でこうですよ、ビジョンはこうなっていますよ、小学校はこうです、中学校はこうです、養護学校はこうです、幼稚園はこうですと、もう長い話は切り取って、外部評価をする立場としては焦点化が欲しかったなど。何を、18年、17年は目標とされているのか。特に、業務実績のところですけども、例えば18年度の計画というところは、1つか2つ書いてあって、あとの実績報告は、たくさん書いてあるわけです。

見ていまして、私、高等学校の場合は、学校経営をするのに非常に厳しく言われているのは、今年度の行動計画は何ですかと。焦点化をして書きなさいと。でないと、予算をやらんよと言うわけですね。そうすると、学校経営室で、うちは、今年はこうこうこういう目標を立てる。だから、これに対して予算をくださいというふうな査定が入るわけですね。従って、査定で0円のところの校長は怒ってくるわけです。何でおれのところにくれん。あかんから、駄目だよと。

そういう査定をされる立場になっているのかどうか分かりませんが、やっぱり担当業務事務部が強化されたのであれば、それぞれの査定で、どこに重みを置くのかということ。予算は限られていますから。なかなか、そのところを焦点化してやらないとですね。例えば18年度の目標だったら、来年も同じような目標となってしまうのと違うんですか。

それから、18年度の行動計画というのを見せて欲しかったですね。例えば17年度の行動計画はどうだったか。その行動計画に従ってどうだったのか。いけなかったら、当然、来年に対して、どういうふうな行動計画にする。そのためには、お金はどれだけ要するというようにですね。やはり、お金の面や、あるいは方針とかそういうのが、どちらかと言うとマトリックスで、きちっとなっていないと分かりづらいですね。

これは、高等学校の場合は4、5年前にしていたのと、よく似ております。こういうふうな評価を4、5年前にしておりました。けども、これでは、なぜ高等学校の場合はいけないかと言うと、生徒が集まらなければ、再編活性化で段々となくなっていく。こういう時代ですから、「どこに重みをつけるか」ということを県にアピールする。アピールするためにはどうなのかということについて校長のリーダーシップが問われる。従って、校長がリーダーシップをしっかりとらなあかんよというふうなことが、常々言われているわけです。

それで、ここでちょっと、欠点だなと私が思ったのは、4つ学校がありますけれども、その上に、私学だったら、理事長、理事がいるわけですね。それぞれの学校園、それぞれの4つが言っても、どこか調整役があって、そしてばちつと言わなかったら、なかなか動

いていかないのと違うかなと、組織的な面で。だから、それぞれに校長先生が見えますけれども、それはそれぞれであって、理事的な立場、高い次元でピシッとやらないと。これは、予算はこうだから、ここはもっと頑張ってもらわな駄目ですよというふうに。例えば、「挨拶運動をしようと思います。どこの学年からやってくださいよ。」と。それがないと、全然、前へ、次の年度はどうかとか、そういうのは進んで行かないんじゃないかなというような気がします。

だから、例えば私が思うんですけれども、附属さんの横に私立の小学校や中学校が、都会のようにできたら、どうやろうかと。どこに特色を持ってやるのかなと。やっぱり4つの塊が1つの場所にあるということが、一番の、何と言うか、メリットとして、隣に私学さんができても対応できるんじゃないかなというふうに思いました。

あと、気になりましたのは、授業を見せていただきましたが、挨拶のところは川北先生が言われましたが、そのとおりでした。授業では、自己アピールがすごいですね。自己アピールをされる。けども、逆を問うと、提案したことについてじっくりと考える時間的余裕というものを、授業の中で、要るんじゃないかなと思うんです。先生がしゃべるかしゃべらんかのうちに、「はい、はい、はい。」と手を挙げる。そういうのもあって良いと思うんですが。

よく、高等学校へ来て、ALTが授業をします。そうすると、今と同じように、ちょっとちょっと言うと、「はい、はい。」とかいうふうにですね。まあ、ALTに茶々を入れるような感じで来るわけですね。そうすると、あなた方は、日本ではどうか分らんが、外国では、まず聞くということが大事だと。聞いて、考えて、そして主張しなさいというのを、ピシッと言われるんですよ。しかも、ALTの中で教職免許を持っている人は、非常に厳しいです。

なので、ちょっと気になりましたね。私らの年齢から言うと、じっくり、幾何とかそういう数学だったら、証明していくためにどうしたら良いかとずっと考えて、そういう時間、あるいは社会でも、こうこうこういうのがあったら、それはどうかなということをやちょっと考えてみようというので、じっくりと考える、静と動の授業形態というのも、まあ、やられているんだと思いますけれども、必要ではないかなと。特に、中学校から高等学校へ来るときの状況で感じるのですが。

附属さんの場合は、中学校の生徒って、広域ですよ。うちの学校へも、附属さんから来ていますよ。そうすると、広域の中で附属へなぜ来るかという、逆に疑問点があるわけですね。うちだったら松阪で、松阪の近くなのになぜ附属へ来るのか。附属にそれだけ魅力があるのであれば、保護者に附属の魅力は何かを問うてみたら、自ずと回答が出てくるのではないかなと。親が行っていたので来ているという者もいるかも分かりません。けども、わざわざ来て、そして、もう一度地元の高校へ戻る子が多いわけですから。

そこら辺のところも、これから研究されると、もう少し、中学校教育、進学という視点でね。小学校や幼稚園もありますけど、中学校は進学という視点が、やっぱり付いてくると思うんですよ。だから、そのところで、もう少しシビアになるんじゃないかなと、中学校のほうはですね。そういうことを感じました。ちょっと感じたことを言わせていただきました。

**【司会 - 蓮尾】** ありがとうございます。それでは、古儀委員、お願いします。

**【古儀委員】** 古儀です。公立小中学校の立場と言いますか、そういう視点から幾つか話をさせていただきます。今日の授業を見せていただいて思ったことですが、流石、附属の学校だなというふうに思いました。やはり公立の学校でいきますと、ああは、みんなが聞き合うということは、なかなか難しい状況があります。これは入学選抜制度ともかかわってくる問題だとは思いますが、テーマとして、繋がり合うというふうなことを、どこかに書いて見えたと思えますけれども、本当にそういうものを目指した取り組みをしてみえるなということを感じたことや、下駄箱の靴が見事に揃っておりまして、本当に感心をいたしました。

魅力ある学校というふうなことに向けて今、取り組みを始められているということですが、公立学校からしますと、附属の学校というのは、研究校と言いますか、教育研究校であり、教育実習校であり、われわれが目指す方向の学校であるということ、私たちはそういうふうに思っているわけですが、それに応え得る、何と云うのか、中身がどうなのかというところで、私たち公立学校の中では、いろんな教育課題をたくさん抱えている中で、やはり、どういう方向に進んでいくのがいいのかということ、絶えず試行錯誤する中で、1つの目標に附属がある。ああいうふうな授業をしたい、していかなきゃいかんのかなということ、を思うわけですが、

そのときに、新しい試みということをして見えますけれども、その新しいという意味の中には、今の教育課題、あるいは公立学校の、普通の学校が抱えている課題の辺りで、どう、こう、繋げてみえるのか。その辺を、ずっと、私自身は文章を探しましたが、特に、その辺のことをよう見つけませんでしたので、その辺、どうなっているのかなということ、を思ったこと。恐らく、それは人事の交流という形で、そのことは受けてみえるんだらうと。テーマを見ましても、やはり公立学校が抱えている課題を取り上げられておりますので、繋げて考えられているんだらうなと思えますけれども。その辺のことはどうなのかということ、を、少し、分からなかったこと。

それから、教育実習というところから考えたときに、教育学部から教育実習を受ける学生に、期待に応えられている、そういう仕組みになっているのかどうか。つまり、これから三重の教育を背負う学生ですので、三重の、何と言いますか、中にある課題と言いますか、そんなこととも有機的に、附属の学校、教育学部ということが、何か三重の教育と繋がって、さらに学生の教育を目指す、そういう意欲と繋がったカリキュラムなり、そういう教育実習の在り方みたいなものを、ずっと読んでいますと、そういうことを考えてみえるなということ、を今、思うんですけれども。そういう点で努力をしていただけたら、ありがたいなというふうなことを思いました。以上です。

**【司会 - 蓮尾】** ありがとうございます。それでは、小林委員、お願いします。

**【小林(芳)委員】** 今日は外部評価委員という形で参加をさせていただきまして、私自身、教育長さんをはじめ、たくさんの立派な先生方がいらっしゃる中でこのような場をいただきまして、本当に緊張しながら参加させていただいております。

その中で、今日は幼稚園を中心に見せていただきました。また先日、18日に附属幼稚園の公開研究発表会にも参加をさせていただきました。そのようなことも踏まえながら、私自身の感想という形になると思いますが、よろしく願いいたします。

今の皆さんのお話を聞かせていただきましても、幼稚園、小学校、中学校が1つになっ

て、教育、保育を考え進められて取り組んでみえます。1つの目標を持つということは、それぞれの子どもの発達と方向性を考えた上で凄く大事なことだなと思います。幼稚園におきまして、いろいろな方と触れ合い遊ぶ体験を大事にされてみえますね。今日も、ちょうど中学校の生徒さんが見えていたところを見せていただいたのですが、大きい子と一緒に遊ぶ中で、いろんなところでちっちゃい子なりに学んでいくと言うか、そういうところがとても大事になってくると思います。私どもの幼稚園でも、中学生の職場体験という形ですか、そういう形で来ていただいて、幼稚園として中学校のお兄さんやお姉さんたちと一緒に遊び学ぶ機会をつくりながら、子どもたちに、大きくなったらお兄さんやお姉さんみたいになりたいなという、夢みたいなものを描かせてやりたいという気持ちも踏まえてやっております。

附属は幼稚園にとっても、目指す幼稚園と言うか、私たちにとっても勉強させていただくところです。先日も行かせていただいて、広い自然環境の中で子どもたちが、自らドングリ拾いや木登りできる環境というのは、昔ながらの大事な、伝統的なものの環境だなと思いました。それは大事にしていって欲しいなというところを、凄く感じました。

現在、子どもたちは、少子化で核家族の子どもたちが増えております。その中で、なかなか大きいお兄ちゃんと遊ぶ機会も少なくなっている現状ですので、そのような体験を通じて、子どもたちにも一緒に楽しんだり感じたりする心が「生きる力」へと通じていくのだと思います。

また、私どもの幼稚園も地域の方やボランティアさんに来ていただいて、一緒に触れ合って遊んだりする機会など、地域の特色を生かしながら進めているんですが、附属では研究会につきましても、幼稚園、小学校、中学校の先生方が一緒になって研究されてみえるというところは凄く羨ましいなと感じました。やはりそういう、いろんない立場から見て、子どもたちを見つめていくというところは、凄く今、大事になっているところだなというのを感じました。

また、今、保護者の中でも子育てで悩んでいるお母さんが多いので、私どもの幼稚園でも預かり保育というのを実施しております。園内開放とか、いろんない形でお母さんと共に地域の方と歩いていくということも今、幼稚園教育、運営で、大事だなと思いました。

そして今日、小学校の様子もを見せていただきながら、幼小連携というところをきっちりされてみえます。職員同士の話し合いの中で、幼小の連携を通じ、就学前教育の大事なポイントをしっかり話し合って研究されてみえます。幼稚園において、小学校に上がるための基本的な力は付けておかななくちゃいけない「連続の学び」をしっかりおさえ、小学校に繋げる保育をきっちり見直しして勉強していかなきゃいけないなというところも、自分自身も学ばせていただきました。

それと、養護学校のほうも、今日初めて行かせていただきました。やはり幼稚園におきましても、自閉的な傾向のお子さんも見られます。なかなか私たち、そういうところも目に入れていたんですが難しいところもあります。そんなとき、今日、養護学校の先生のお話を聞かせていただきまして、私たち自らも勉強し、そして相談させてもらうことも大事ななと思いました。

いろいろそういうところで、自分の、本当に感想だったと思いますが、今日は本当にこういうふうな機会を与えていただきまして、ありがとうございました。

**【司会 - 蓮尾】** たくさんの貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。それでは、ただ今をもちまして座談会を終わらせていただきます。引き続き、次の予定でございますけれども、これから5分ほどご休憩いただき、今、私の時計で17、18分遅れておりますけれども、3時40分頃からは始めていただきまして、学外委員の皆様には20分ほどでご意見をまとめていただきました後に、4時から、再びこの外部評価委員会の講評を始めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

( 講 評 )

【司会 - 蓮尾】 ただ今より、学外委員の皆様によるご講評、評価をお願いいたしたいと思ひます。それでは、座長の山口委員より、ご講評をお願いいたします。

【座長 - 山口委員】 それでは、若年で申し訳ございませんが、ご指名でございますので、外部委員として評価をさせていただきます。まず5つの観点から、委員の内部で話し合いをさせていただきます。

まず1点目の観点は、学校の教育状況についてでございます。教員の指導技術は一定評価できますということで、プラスの評価ですが。例えば教員が率先・実行して挨拶運動することというのが大事ではないかと。子どもたちにさせるのではなく、まず自分たちが行動を起こしてみてもどうでしょうか、ということでございます。

それから、教育内容について、カリキュラムについては、本資料では特段、特色的なことは見られませんが。幼・小・中、個人カルテ等を利用した学びの継続ということをやられてはどうかということ、これは私、座長の意見でございますが、そういうことがあってもいいのではないかなと思ひます。以上が学校の教育状況についてでございます。

2点目の観点、児童・生徒が達成した教育の水準についてでございますが、子どもたちの学力・体力水準、これが2点目でございます。確かなデータがないものの、本日の授業参観等で、一定の学力は付いているのではないかなと思ひます。ただ、学力については、授業を受けるといふ子どもたちの姿勢について、先生がきちんと子どもたちの授業実態をつかまえて、流れを抑えると。じっくり考えさせたり、作業をさせたり、めりはりのついた授業展開を今後お願いしたいなど。子どもたちにとって、集中力とか聞く力というのは、ある一定の限界がありますので、子どもたちに対してどう向き合うのか、授業をどう展開するのかということが大事ではないかと、委員の中から出ておりました。これが、子どもたちの学力・体力の状況でございます。

3点目の観点、一番根幹でございますが、学校経営についてでございます。私も外部委員は、附属校園は公立小中学校に対して、今日的な教育課題の解決に向けて、方向性を示していただける学校園であって欲しいと思ひています。そのために、まず、例えば幼・小・中一貫の教育の在り方を模索していただくとかですね。あるいは、習熟度別とか個別学習、附属小学校では学びの共同体ということをやってみえるようですが、この辺りについて、先導的な研究をやっていただいてもいいのではないかなというふうに思ひます。

それから2点目でございますが、子どもたちにとっても魅力のある学校園であって欲しいわけでございますが、教職員に魅力ある学校園づくりにもなっただけのために、開かれた学校づくりに一層、取り組んでいただきたいと思ひます。

このことにつきましては、3点目の人事交流についてと関連するわけでございますが、働きがいのある職場。特に、働きがいのある職場と関連するんですが、2、3年ということじゃなしに、原則5年で人事異動をするということでございましたが、年齢構成でバランスの良い構成を、ぜひ、お願いをしたいなど。要は、その先生方のスキルが、その学校園に蓄積される、そういう時間が要るのではないかと。3年とか4年で変わっていったら、特にその辺りが何も残らない、附属校園にはですね。その辺りを指摘する委員もございました。

これは余談でございますが、県の教育委員会では、教育事務所を廃止しました。そうい

う中で現在、小中学校も統廃合が進んでおり、優秀な教員とか管理職はなかなかポストがないというのが実態でございまして、今後そういう方々が附属の校園で頑張っていただいて、戻れるようなポストになっていくといいなと。あるいは、そういうところと人事交流ができていくと、何か、附属に行って10時や11時まで教材研究をしていて、やっぱり公立小中学校に戻ったら、ちゃんと、ある程度、一定待遇もなされたなとかですね。そういうことがあってもいいのではないかと。これは個人的な意見でございますが、そういうようなこともあるのではないかと。やはり、ご苦勞いただいた方に、何とかならないのかなというのが、個人的感想でございます。

それから4点目でございますが、施設・設備については、耐震化工事、待遇の改善もなされましたが、校舎等の、まだまだハードで十分でないところがありますので、教育学部さんと連携をして解決に向けていただきたいと思います。

5点目が、大学学部との連携を一層強めていただきたいということでございます。その中で、4つの校園長と学部長との私的懇談会を、2カ月に1回持つようになりまして。これは非常に評価されるところでございますが。テーマとか、あるいは学部長のリーダーシップの発揮とか、そういう辺りで、組織的なマネジメントができるような機関を設けられてはどうでしょうか。4校園が一緒の敷地にあるんだから、分かり合っていると言いながら、組織価値観が別々であったり、連携がなされていない。あるいはトータルに校園を見るという意味で、学部長をトップに、まあ、学部長はお忙しいと思いますが、そういう中でシステム化した組織が望まれるのではないかと意見が出ておりました。

それから、4点目の観点、学校評価についてでございます。学校評価については、緒についたばかりということではございましたが、学校評価をやられる際には、抽象的・観念的な目標でなく、具体的な目標を定めて、年度行動目標をきっちり定めて、全教職員が取り組めるような目標を定めていただいて、それを評価し改善に繋げていくという仕組みが必要ではないかということでございます。

最後、5点目の観点、地域住民、保護者との連携でございます。地域住民との連携は、附属校園では非常に難しいということ、特異性があると、公立小中学校とはちょっと違うというものの、保護者との連携を一層強めていただきたいと。幼稚園のほうで保護者とのコミュニケーションを大事にしているというような発言もありましたが、ダイアログ、お互い双方向の対話をしていただいて、幼稚園の保護者が小学校の保護者、中学校の保護者になっていけるように、ぜひ、全体で取り組んでいただきたいと思います。

で、保護者の方たちが自分たちを高めていくとか、あるいは子どもたちの課題をどのように解決していくかということ、保護者自身も考えられるような組織に対する支援を校園の職員もしていくという、双方向の関係を築いていただけるといいのではないかと。5点にわたりまして、委員の内部で話をさせていただきましたが、補足することがあれば、よろしく願いいたします。

**【司会 - 蓮尾】** ありがとうございます。外部評価委員の皆様方、他に何かご意見等ございましたらお願いいたします。それでは、特にないようでしたら、最後になりますが、丹保学部長よりご挨拶をお願いしたいと思います。

**【丹保学部長】** 長い時間、ありがとうございます。今、頂いた講評をゆっくり、われわれとしても検討しまして、今後、特に現在、将来構想の検討が進行中でございますので、

その中にしっかりと位置付けてまいりたいというふうに思います。

附属は、一時、非常に、県下の先生方が、むしろ、好んで来ていただいたところもあるんですけれども、しばらく、人事交流の希望者が少ないという状況が続いていることは、われわれも承知しているわけです。今、いろんな意味で、かなり、ここ近年、改革を進めておりまして、全国的に見ると、非常に進んでいるところもあるわけですが、まだまだ一度落ちた評価というのは、なかなか上がらないのでございまして。これを皆様方もぜひ、給与は、基本給は変わりませんという、これは全国的に珍しいわけですし、ご理解いただければと思います。

もちろん、今日頂いたように、まだまだ、まったく不十分だと言われれば、そのとおりでございまして、その辺をどのように解決していくかということは今、検討中ですので、皆様の、またご意見を参考にしていきたいというふうに思っております。

今日は早速、われわれ、反省しておりまして、もう少し、皆様方のご意見を頂いて、われわれの意見を述べて、さらにまた皆様のご意見を頂くというような時間がちょっと足りなかったことを残念に、せっかくこんなに立派な皆様方に来ていただいているのに、その時間がなかったことを、非常に残念に思いますし、おわび申し上げなければいけないというふうに思います。

本当に、この機会をもちまして、今後もぜひ、お気付きのことがありましたら、ぜひ、おっしゃっていただきたいというふうに思います。玄関のロータリーのところも、草がぼうぼう生えていて、これをですね、草がぼうぼうで、この学校には、私の教え子は連れて来られないという、そういうきついおしかりを受けて、それ以降、今では草がいつでもキッチンと刈られているという状況になっています。それは、やはりそういう一言のために、われわれが奮起して頑張ったということでもありますので、今日のいろんなご指摘に対して、われわれも奮起して頑張っていきたいと思っておりますので、今後もよろしく願います。本当にありがとうございました。

**【司会 - 蓮尾】** 本日は、学外委員の皆様、お忙しいところをこれからの学部のためにご講評をいただき、本当にありがとうございました。これもちまして、第7回三重大学教育学部外部評価委員会を終わらせていただきます。不慣れな司会にもかかわらず、ご協力いただき、厚くお礼を申し上げます。